

# 心の傷をいやすとき

karinomaki

## はじめに

---

この文章では、心の傷との向き合い方について、一つの短編をまじえて、そして、カントの純粹理性批判と判断力批判に照らし合わせて考えてみたいと思います。

## 形見のイヤリング

---

一人の少女が、客船に乗っていました。少女は、耳にイヤリングをつけていました。少女は船の客室を出て海を見ていたのですが、突風が吹き、イヤリングは二つとも海に飛ばされてしまいました。周りにはたくさん人がいたのですが、少女は大声で叫ぶやいなや、海に飛び込もうとしたのです。近くにいた人が少女を止めたのですが、少女は狂ったように、「離してください！！邪魔をしないでください！！」と叫び、なおも飛び込もうとします。周りにはものすごい騒ぎになりました。「あの子は気が狂ってしまったのか？」と人々は口々に言います。

その時、一人の男性が、「いや、きっと深いわけがあるのだ。僕が聞いてみよう。」と、少女に歩み寄りしました。

「君は死にたいのですか？ここから飛び込んだら、死んでしまうよ。」と、男性は言いました。

すると少女は、「死にたいのではありません。大切なイヤリングを取りに行くのです。」と、少し我にかえったような口調で言いました。

男性は、「こんなに大きな海をどうやってさがすのです。風も強いし、海は荒れている。100%君は死んでしまうよ？」と言いましたが、少女は、まったくひるまず、言いました。「できるなら生きていたい。でも、あのイヤリングは母の形見なのです。きっと母が私を呼んでいるということです。さあ止めないでください。母が呼んでいるのですから。」

(こんな理由で海に飛び込むなど、あってはならないことですが、肉親を失った悲しみをいやすという、私の体験もベースになっています。少女は、母親を失った傷がいやされていないのです。そして、大きくぽっかりあいた穴(海)に飛びこもうとしています。自分の傷が痛いとき、人はやけになってもっと痛い場所に飛び込もうとしてしまいます。私もそういうことをくりかえしていたことがあります。そこからどうやって立ち直るか、この少女の傷をいやす方法を考えてみたいと思います。)

## 超感性的なもの

---

私は、肉親を若いときに失いました。形見も持っています。そして、この少女の気持ちもわかります。だから、この世界を突き抜けて、死後の世界に心をつなぐ方法を、この話から割り出してみたいのです。その言葉が、カントの判断力批判に出てくる、「超感性的なもの」だと思うのです。この話では、この言葉が、どういう位置にあるのか書いてみたいのですが、この言葉は、この世界の事物から、天空へと突き抜けていく力であると、大まかに書いておきます。そのことをふまえて読んでください。

## 心の傷をいやす

---

自分の傷を上手につつむということを少しずつしていくと、時空を突き抜けるような力を感じる場合があります。

カントの哲学書の、「純粋理性批判」の中で、最初の方に「時間と空間」が出てきます。時空は、この世界を形づくる基本です。この中でもがき苦しむのが、人生かもしれません。なぜなら、特に人生の初期において、自分の傷との向き合い方も、いやし方も、学習できていないときに、大きな痛みはやってきて、そのトラウマは消そうとしてもなかなか消えないものだからです。しかし、その傷を優しくつつみこみ、時間をかけてゆっくりいやすことは、とてつもなく素晴らしいものをつくるのです。それが、「超感性的なもの」です。

## 「突き抜ける」

---

自分の傷はなかなかいやせない・・・それはただ単に、私自身に原因があるからかもしれないですが、私は、肉親の死のあと、不思議な体験をしたのです。肉親の形見を手にとってじっと泣きながら思い出にふけていたとき、その形見の時計が、私に「強く生きろ。この時計を生きる支えにして。」というメッセージをくれている気が確かにしたのです。そのとき、時計がずっしりと重くなったような感じがしたのです。

「私は何かを突き抜けた」と、そのとき思いました。この感覚は、「時計」という、この世界の時空のものから来ました。時空の中の物の中から、感性の世界を突き抜ける感覚があったのです。それが、「超感性的」ということだと思うのです。

## 傷をいやすことと、「超感性的なもの」

---

自分の傷をつつみこむときに、誰もが感じること・・・それが、「超感性的なもの」を感じることでと思います。そのときに何が起きているかを、私なりにカントの哲学から分析してみます。

この世界の時空の中の物を、「感性」で受け止め、「悟性（知性）」で思考するということを、私達は日常の中で常に行っています。このとき、「思考」が成立するための頭の中の枠組みを、カントは「純粹悟性概念（カテゴリー）」と書いています。（純粹理性批判）

このカテゴリーを、時空の中の物が、「つきさす」と考えてください。「形見」について考えると、わかりやすく説明できます。時空の中で生きていた、大切な人は、私の肉親の場合「時計」を、話の中の少女の母親の場合「イヤリング」を大切にしていました。

その、故人が物に込めていた「念」が、物に残っていると考えるから、「形見」は大切なのです。その「念」は、カテゴリーという、思考するときには頭の中を整理する枠組みを、つらぬくのです。物は、精神がたくさんこめられるがゆえに、精神（思考）をつらぬき、その先の世界・・・つまりこの世を越えた世界を示すのです。形見が故人へとつながっていると強く思うことには、ちゃんと根拠があるのですね。

そして、故人への思いを思い出すとき、つまり、傷を優しくつつみこむとき、物は心をつきぬけ、天へとどいていく・・・これが、「超感性的なもの」として物が精神を越えて飛翔するということなのです。

## 純粋理性批判と判断力批判

---

これで、物と心、天と地がつながりました。カントは純粋理性批判で、物の世界から精神の世界へのアプローチを書き、判断力批判で、その二つをもっと越えていくかのような、「自然と芸術」という、天空へのつばさがないととどかない、「超感性的な世界」について書いていますが、この世界の物と心との対峙によって、地から天へと飛翔できるということです。

それには、痛み、傷が必要なのかもしれません。大切な人を失ったとき、人は初めてこの世界の先の世界を感じるのです。この物語の少女も、そのことを感じる事ができれば、海へ飛び込もうとはしなくなるでしょう。



## 物語の続き

---

「イヤリングとともに母が呼んでいる」と言って、海に飛び込もうとする少女に、男性は言いました。

「君にとって、この海は、イヤリングとともに君のお母さんがいる場所なのだね。じゃあ、こんなふうになるといい。この海は、海で亡くなった人たちもたくさん眠っている場所なのかもしれない。でも、この海は、地面の中の天なんだ。空と海は、同じ、限りなく大きな自然なのだから。君の大切な形見は、この地の中の天で、この世界の呪縛を解かれて、もっと美しいものに生まれ変わっている。・・・それが、『心』なんだ。君の心と、君のお母さんの心だよ。心は、物という檻がないほうが、幸せなのかもしれないよ。そのほうが、自由に飛びまわれるのだから。君も、君のお母さんのように、いつかこの世界の時空の檻を越えて、自由に飛びまわれる。でも、それは、この世界で、この世にしかない宝物を見つけてからだよ。新しい宝物を自分で見つけてごらん。物でも精神でもいい。それが見つければ、人生は素晴らしいと思える。お母さんのところに行くことが前向きと言えるだろうか。この世界で、お母さんを亡くした傷をいやせることができれば、きっと何か大切なものが見つかるだろう。大切なものを見つけて、生まれてきた意味をわかることが、いちばんの親孝行だよ。」

## 時空の中の宝物

---

この世界の中の、大切なものは、物という、むなしい檻の中にかくされています。それを、見つけるにはどうすればいいか・・・苦しいことを乗り越えていくしかないのかもしれませんが。何の苦もなく手に入れたものを、人はなかなか大切に思えず、すぐに他のものをもとめていってしまうからです。この少女は、お母さんの形見が宝物でした。しかし、本当の宝物は、少女の傷をいやそうとしてくれた、この男性の言葉なのかもしれません。もし、何かを失って、心に穴があいても、必ずいつか、その穴を埋めてくれるものが見つかる・・・この世という時空の中は、宝探しの世界なのかもしれません。

## 傷をいやすという宝

---

大切なものを失った心の傷をいやすしているうちに、もっと大切なものが見つかるはず。傷をいやすことそのものが、人生の宝なのかもしれません。ぐちゃぐちゃになったものを美しく整え、いやす時間ほど美しい時間はありません。その美しい時間を、たくさん感じて、大切なものをたくさん見つけてください。その時間こそが、時空を越えて超感性的なものに手がとどくときです。